

人は
地図を持たない僕らは おんなじ世界の中で
道なき道を行くしかない 無知な旅人

この場所で足踏みをして 一步を躊躇うのは
変わらないことを笑うくせに 変わることを恐れてる
そんな

振り向けば

君の過去は 確かにそこに在って
足元を見降ろせば そこには今の君が在るけど
顔を上げた君の視線の先に広がるのは
期待と不安の入り混じる の

誰かと比べ

そんなことに何の意味があるのだろうか
それぞれがそれぞれの道を歩むこの世界で

もし君が 今に自信を持ってず 迷うのなら
5年先 なりたい自分を 思い描いてみて
今するべきことが 見えてきたその時に
次の一步を きっと踏み出せるだ

ひとつだけ確かなことがある

君が一步踏み出した先が 君の道になる

この号を作成するため、後期は「飛翔」編集室に一人でこもることがよくあった。誰も見ていないとなると、手を抜くのが悪い癖で、編集室でも真面目にパソコンに向かうこともあれば、携帯をいじったり、編集室にあった少 た た た も多かった。

その流れ の の の
る。几帳面にファイリングされているそれらを開いてみたとき、
思ったのが、企画の面白さである。どれもこれも、学生目 の であ
り、様々な工夫 り、
ろであり そ

10年以上前のオリキヤンのレポートがあったり、写真の の
装から、そして「飛翔」本文に使われている今より若干薄くペラペラな
紙からも、時代を感じてしまう。

昔の編集委員は今より少し多かったんだと知った。アメリカへ行った
旅行記や、いじめに関しての座談会など、今とは少し趣向が違っている。
そして、日本社会とも関係あるだろうが、学生が明るく、創造的エネル
ギーに満ちているように、記事の背景から感じた。

昔は頑張っ

をつくりたい、という思いがでてきた。自分で考えて、そしてみんなの
意見を出し合って、色々な個性が溶け合った、総科らしい「飛翔」をこ
れから作っていききたいと思う。

今回紹介す 25

出身の私からすれば、雪がふるみぞれがふる、であった。通学路では靴も濡れ、雪遊びはおるか雪合戦すらできず、更には洗濯物も干せない。単なる寒さの象

な さ

重く澱（よど）んだ空から落ちてくる みぞれ
白くすきとおる冷たさは

〈自分とは何かと考えていた、雪の降り積もったとある朝。〉

降っても降っても
決してつものることのない
たどりつけない想いに こみあげる涙のように
それでも落ちてくるあめゆき

きながら、悶々と毎日を過ごしていた。〈

わたしはいったい何者なのだ――

答えるものがない闇の中で 一心にさがしつづけ

狂わんばか 激

〈自分が誰なのか、いったい何のためにこんな生活を送っているのか。いくら考えても答えは出ず、もうなにかも投げ捨ててしまいたい、この中から逃げ出したい、そう思う時もあった。〉
けれどいつしか夜が明けて
みぞれは雪に変わっていた
確かにそこにもつもっていた
大地と同じ広がり
ほんとうの白さで輝きながら

〈しかし、たとえ今の自分が嫌いでも、それの自分が自分分。それは、れ、き、い、う。、分は、、分とは違うのだ。だから、今日の自分をう。う。〉

そんなことを思いながら、臨時休、と、をいた。

今年一番の積雪。
広がった銀世界。

心が一気に洗われた朝だった。

去年の夏、僕は部活の仲間と一緒に韓国
船で釜山に

は
もなく、バスに轢き殺されそうになったのも一度や二度ではありません
でし
がありました。印象的だったエピソードをいくつか紹介します。

○韓国料理の洗礼

走り始めて初日の晩、鍋屋に入ってメニュー
の写真が載っている。店主に「これ辛いですか？」と聞くと、「辛くな
い、辛い
でもなく辛いものが出てきた。僕達が苦しみながら食べているところを
見て店主
て

○親切すぎるおじさん

ン（健康ランドのようなところ）です」と答えると「そこはやめておけ」
と言われ地図を引っ張り出し別の店を紹介されるが場所がいまいち分か
らない。すると、店主は店の奥から自転車を引っ張り出してきて「つい
て来い！」と言うやいなや夜の街に飛び出して行ってしまった。人込み
を自転車のベルで蹴散らして道を作るおじさんを追いかけ、やっと到着
するとおじさんは値
お
さ
は
入れてくれるように言ってくれた。おじさんは最終的に服を脱ぐところ
まで付いてきた。

○大量の桃

とある街で露店の桃を買おうと思いおばさんと交渉した結果、10
3000ウォン（300円弱）だったので「半分でもいいから半額にして
くれ」と言ったら値段だけ半額になってしまった。しかも数えたら12個
も入っていた。自転車
よい
で
た
も
ることになった。

総じて、韓国の人たちはとても親切で、食べ物は美味しく、田舎の風
景はおだやかで、韓国はとてもいい国でした。韓国に旅行に行ったとき
は、少し足を延ばし
の違った側面が見られますよ。

「続・心にうつりゆくよしなしごとを……」^ゆくよしなし

ときに改札機や読^み 機に

か

了する。実に便利なシステムだ。ちなみに、全国で最初にこのようなカードを導入したのは、東京でも大阪でもない、広島の「スカイレールサービス」なのだ。雑学程度に覚えていると、この先どこかで役に立つことが……普通に生活している分には、ないと思う(笑)。

さて、前回の号の特集記事中でも触れたが、
「テツ」である。バスファンでもある。ならば、ICOCAやPASPYは当然持っているはずだと思いのことだろう。ところが、実はこれらのカードは持っていない(正確には、「ICOCA」を持ってはいるが、使っていない)。なぜか。それは、「使い終わった切符ドを集める趣味があるから」である!!

使い終わった切符は、改札口で申告すれば記念に持ち帰らせてもらえる。また、バスカ
かおもしろい。しかし、ICOCAを持ってしまうと、切符を買う必要
がなくなるので、使い終わった切符を記念に残すことなんてできない。
PASPYを持ってしまうと、必然的にバスカードを買わないことにな

あ が

ている。本当は昨年10月いっぱいバスカードの販売が終了するはず
だったが、幸か不幸か(?) PASPYの品薄状態が続いているとのこ
とで、バスカードの販売は現在(1月)も続いている。しかし、次回の
号が発行される頃には、きっとバスカードの販売が終了し、僕の財布に
もPASPYが入っていることだろ こ が 流

い。そもそも、

は「PASPY」とも「〇〇ピー」つながりで積極的に仲良くしていくべきなのだろう(笑)。

結局のところ、僕は使い終わった切符やバスカードを手元に残すためにICOCA A

りのときに改札

の

が完了する」というシステムそのものを嫌っているのではない。むしろ、
こういったシステムを利用することに憧れている。とりあえず今はそれ
よりも使い終わった切符やバスカードを手元に残すことを優先している
わけだが、本当は「ピッ!!」と財布をタッチして運賃を支払いたくてた
まらな な 年 が

はものすごく嬉しかった。ご存知の方もあろうかと思うが、生協の組合
員証の機能も学生証に載り、生協での支払いは学生証を入れた財布を読
み取り機にタッチすれば す

そんなわけで、新しい学生証で初めて生協での支払いを行っ
どれだけ晴れがましい気分であっ いが

楽しくてたまらない。だからきつと、近い将来PASPYを使い始めた
暁には、そのとたん、どうしても早くPASPYを買わなかったの
だろうと後悔するのだろう。何とも身勝手なことである。

【後日談】「生協での支払いは学生証を入れた財布を読み取り機にタッチすれば完了
する。」と書いたが、ある日生協のレジで「カードの磁気が弱いので、できれば財布
越しではなく直接タッチしてもらえないか」と言われてしまった。僕の認識が誤り
でした。皆さん、真似をされないようにお願いします。

「ニックネームの功罪」

19生 中村 洋平

講義中、メールの本文、余暇時間。いろんな時に、いろんな所で、いろんな人に呼ばれる「がり」というニックネームを私が拝命しましたのは、大学1年の春。正確には小学校6年生の頃について、味というのは……という話せば長い話は、今はどうでもいいので割愛します。

入学して3年。ニックネームで気軽に呼び合えるお

仲のいい友達も出来ました。その一方でオリキャンで同じ班だったのにすっかり縁の切れてしまったような人もいます。そんなみんなが、「がり」と私のことを呼んでいるのです。別にそのニックネームが嫌いなわけじゃありません。でも、いつまでも「がり」じゃ、いられないんです友人にな

しょう。彼の、彼女の名前は知ってます。でも、呼んだことがない。ニックネームと一緒に友人にもサヨナラを言わないといけないなんて、そんな道理はありません。でも、今、そんな分岐うな気がします。

サークルや、バイトでは名前呼びあっています。友人であり、同時に仲間であるのです。私は、20年くらい生きてきたところで、初めて人を「名前」で呼びました。記念すべき第1号の彼はサークルの同輩でした。

いままでの

いって今まで
てい
が
せい
い
ない

のですが、そうではないのですが、初めて、気の置けない仲間に出会った気がした

決して他の信頼していないとかそういうわけじゃないのです。
ておきたいと思うのです。
の、
よう。
がしています。

「思い出したこと」

20生 山崎 弦太

飛翔な日々のバックナンバーにあだ名をテーマにしたものがあつたのを見て、僕はふと思ひ出しました。それは小学校1年生の春の下校途中のことで、僕たちはそれぞれのあだ名を決めていたのです。誰かが僕に「やまさきだか やつちだね」と言いました。それから、みんなは「僕はたかひろだからたつちだ」とか、「あつろうだからあつちだ」とか、「かつちだとかみつちだとか口々に言うのでした。その時、たきおかさとし君が、「たきおかだからたつちだ」としました。でも「たつち」はもうほかの人のあだはそれを指摘しました。「たきおか君はどうか。としか」「さつち」にするのかな」と僕は様子を見ていたのですが、その時たきおか君は言ったのです。「僕はたきおかだから、たつきね。」

それから、たきおか君とは高

た